〔金杉名譽會頭古稀記念論文〕

咽頭扁桃腺膿瘍ノ一例

H. Senoo: Ein Fall von dem Rachenmandelabszess.

名古屋醫科大學耳鼻咽喉科教室 (主任 阿久根教授)

醫學士 妹尾日出生

扁桃腺＝於ケル化膿性炎症ハ日常吾人ノ遭遇スル疾病ナルニ、其實質内ニ營爲セル膿瘍ノ觀察セラル、機會ハ非常ニ尠ク稀有ト謂ハネバナラス。

本症ノ報告例ヲ辿ルニ、東西ノ文献ヲ合算シテモ漸ク數指ヲ出デズ。然モスベテ口蓋扁桃腺ニ發見セラレ、咽頭扁桃腺ニ關シテハ1904年ロバート、デルゲル(Robert Dölger)氏ノ唯1例アルノミデ即チ19歳ノ兵士ノ齒痛ニ續イテ顔面痛、嚥下痛、頭痛及ビ39°C内外ノ熱發ヲ訴ヘ、全身症狀ハ終ニ腦壓症候ヲ呈スルマデニ惡化シ、局所々見トシテハ咽頭穹窿部ニ膿汁ニテ蔽ハレタ硬弾力性ノ表面滑澤ナ3ノ發赤セル腫物ヲ認メ、且ツ其組織片ノ檢索ニヨツテ咽頭扁桃腺膿瘍ニ相違ナキヲ確メタトイフ。

本邦ニハ井上、笠井兩氏ノ口蓋扁桃腺ニ就イテノ2報告アルモ、咽頭扁桃腺膿瘍ニ關シテハ絶無ト稱ス可ク、本例ヲ以テ或ハ嚆矢トスル。

次ニ病理組織學の方面カラノ出現率ヲ調べルトエッチ、リッター(H. Ritter)氏ハ、多數ノ屍體口蓋扁桃腺ニ於テ囊腫ヲ見タノミデ、他ニハ1例ノ膿瘍ヲモ存セナカツタトイヒ、桑原氏ハ專ラ囊腫統計ノ目的デ同扁桃腺130個ノ中3個ニ於テ囊腫ヲ觀察セリト報ズルモ膿瘍ニ就イテノ1行ノ記載ナキヲ見レバ或ハ皆無デアツタカト

モ想像セラレル。

エフ、リオン(F. Lion)氏ハ膿瘍ハ摘出材料ノ60%ヲ占有セリト記録シテキルガ之ハ病的扁桃腺ノミヲ對象トセル事及ビ囊腫ヲモ加算セル疑ガ濃イトイハレテキル。以上ハスベテ口蓋扁桃腺ニ就イテノ統計デアルガ、咽頭扁桃腺ニ關シテハ私ノ涉獵シタ範圍ノ文献デハ發見スル事ハ出來ナカツタ。

膿瘍ノ成立ハ原則トシテ囊腫ノ既存ヲ不可缺ノ前提トシ、反之扁桃腺ノ急性炎症カラ直接ニ誘導惹起セラル、如ク思惟セラレルガ事實ハ然ラズ單ニ1誘因ニ過ギナイ。周知ノ如ク扁桃腺囊腫ノ大多數ハ炎症ノ爲メ閉孔部ヲ絞約閉塞サレタ腺窩ノ内腔ニ脱落上皮、白血球等ガ漸次蓄積シテ周壁ヲ壓迫擴張シテ生ゼルモノデ、此閉鎖性囊狀腺窩即チ囊腫ノ内容物が脂肪化セバ所謂酪酪性膿瘍トナリ、新機轉ニ由來シテ病原菌ノ感染ヲ見レバ、始メテ眞ノ意味ニ於ケル膿瘍ヲ形成スル。

之等膿瘍ノ經過ハ何レモ慢性デ自覺的ノ症候ヲ缺クタメニ看過セラレ、更ニ酪酪性膿瘍ハ扁桃腺ニ表在シ、時ニ際シ1乃至數個ノ帽針頭大カラ大豆大ノ黃色斑ガ透見セラル、事モアルガ、眞正膿瘍ニ至ツテハ腺窩ノ深部ニ成立シ然カモ扁桃腺自身ノ容積及ビ外觀ニ變化ヲ呈セザルガ

故＝臨牀上ノ診斷ハ困難。且ツ有耶無耶ノ裡＝經過スル原因トナル。

但シ非常＝稀有デハアルガ再ビ新シイ扁桃腺疾患ニヨツテカゝル膿瘍ガ賦活サレテ急性ノ症候ヲ展開シ。他覺的＝ハ扁桃腺ノ發赤腫脹。大ナル折＝ハ波動ヲ證明シ。尙ホ進ンデハ頸部蜂窠織炎。縱隔竇炎。或ハ敗血症等ノ餘病ヲ合併スルコトガアル。更ニ留意スベキハ身體何處ニモ推想シ得ベキ病竈ナキニ拘ハラズ敗血症ノ隱蔽セル淵源トシテ扁桃腺膿瘍ノ指摘セラルハ場合ガアルト言ハレル。

余嚮日口蓋破裂ヲ有スル患者ニ於テ親シク咽頭扁桃腺ノ膿瘍ヲ觀察スル機會ヲ得タルヲ以テ敢ヘテ諸賢ノ御參考ノ一資ニ供スル次第デアル。

症 例

患 者。10歳ノ娘。

家族歴。祖父母死因不明。兩親健在。同胞4人中1人ハ肺結核デ死亡。次兄モ同病ニ罹患。他ハ健康。

既往症。風邪ニハ屢々冒サレテキルガ著患ニハ罹ラナイ。曾テ「レ」線検査デ肺門淋巴腺腫脹ヲ診斷サレテキル。

口蓋破裂ノ爲メ幼時流動食時代ハ食事ニ際シ飲料ガ鼻腔ニ逆流シテキタガ現今ニテハカゝル事ハナイ。

現症歴。3日前ニ氣分優レズ惡寒ヲ感ジ。發熱 38.8°C 。頭痛ヲ訴フ。食慾稍々不良。乾咳少少。特ニ嚥下痛其他ノ局所的違和モ訴ヘナイ。熱ハ漸次下降ヲ示シテキル。

現 症。體格稍々纖弱。榮養普通以下。皮膚蒼白ニ傾キ。頸部淋巴腺群ハ多ク腫大セルモ特別ニ壓痛。或ハ大ナルモノハ認メナイ。

全身的＝病感ノ印象ヲ受ケズ顔面表狀モ暗翳ナシ。熱 37.7°C 。循環器＝異狀ナシ。肺臟ハ右後下部ノ呼吸音少シク銳利。

口 腔。齒牙ハ兩下第2大臼齒ヲ缺除スル外1本ノ齲齒ヲ見ズ。舌ハ白苔ヲ被ムル。軟口蓋ノ全長ニ亘ル廣キトコロハ約2cmノ幅ノ破裂孔ヲ有スル。

鼻 腔。粘膜輕度ニ發赤腫脹シ分泌物少量。前鼻鏡検査ニヨツテモ鼻咽腔ヲ望見出來ルガ詳細ハ不明。

鼻咽腔及ビ咽頭。全面ヲ通ジテ粘膜ノ充血ガアリ。口蓋扁桃腺モ肥大シテキルガ急性加答兒ノ所見ハ左程高度デハナイ。奇異ニ感ズルハ口蓋破裂ノ存在ノ爲メ熟視スルヲ得ル鼻咽腔ノ變化デ。其穹窿部即チ咽頭扁桃腺ニ該當スル位置ニ兩側歐氏管隆起ノ間ニ介在シ。此側方ノミナラズ何レノ周圍トモ著明ナ境界ヲ有スル卵圓形拇指頭大ノ丘隆狀腫脹ヲ認メル。上半部ハ凹凸不平ナ一見直チニ識別可能ナ腺樣組織ニテ蔽ハレ。下半部ハ平滑ナ表面デ。觸診スレバ波動ヲ感ジ。腫脹中央部ニ膿點アリ。之ヲ仔細ニ觀レバ摺鉢狀ニ陷凹シ僅ニ少量ノ膿汁ヲ滲漏スル。膿點カラ消息子ヲ挿入シテ内腔ハ廣潤囊狀ナルヲ探知シタ。注射器デ内容ヲ吸引スレバ濃厚ナ膿デ。此塗抹標本ハ4回共大中小ノ双球菌ヲ證明シ。結核菌ノ檢出ハ不可能デアツタ。

頸部ノ運動及嚥下作用ハ支障ナク。頸椎ハ壓迫或ハ打敲ニ對シテモ敏感デナイ。

處置トシテハ初メ寒性膿瘍ノ疑念ヲ挾メル爲メ特ニ切開ヲ控ヘ膿點ヲ唯擴大スルニ留メ。「プロタルゴール」。「トリパフラビン」等ノ局所ノ塗布及含嗽ヲ命ズ。

2月17日。無熱。一般狀態良好。腫脹ハ縮小

シ、少量ノ膿ヲ漏出セルノミ。「レントゲン」寫眞ハ頸椎ニ異狀ヲ示サズ、頭蓋底ノ映像ハ詳ラカニ判ジ得ナイ。

2月19日。腫脹ハ全ク減退シテ其跡ニハ紅色稍々浮腫性ノ淋巴濾胞ノ群簇即チ腺様増殖ヲ見、膿點ナル陷沒點モ明カデナイ。以後來院セナイ。其後5ヶ月再來セル故精査セルニ當該部ニハ何等異變ヲ認メ得ナカツタ。

考 案

鼻咽腔疾患ハ診察ガ困難、且ツ關接視診ニ訴ヘザルヲ得ナイ爲メ等閑ニ付シ易ク、且ツ其他覺の觀察モ杜撰ヲ免レナイ。本例ノ如キハ全ク局所ノ自覺の病訴ヲ缺ク爲メニ口蓋破裂ナカリセバ、或ハ看過シテ誤診ニ陥ラナカツタトハ保シ難イ位デアル。又鼻咽腔ノ膿瘍ハ中咽頭ノ夫レニ比シテ遙カニ稀デ日常ノ診療ニ縁遠キ病患ナル爲メ蛇足ナガラ一般的考察ヲ加ヘ本例トノ類症鑑別ノ資ニ供シタイ。

先ヅ第1ニ原發性咽後膿瘍ヲ舉ゲルガ本症ハ概ネ5・6歳以前ノ幼兒ニ來リ、夫レ以上ノ年長兒ニハ尠ク、然カモ位置ヲ第2頸椎部以下ニ占メ、本例ノ如ク上方ニ偏スルコトハナイ。

次ニ頸椎及ビ頭蓋底「カリエス」ノ流注膿瘍ニツイテハ患者ハ多分ニ結核性素質ヲ有シ、當初疑問ヲ抱イタ程デアルガ經過、頸部運動ノ正常、又頸椎炎ニ特有ナル頭部保持位ノ缺除、或ハ「レ」線寫眞カラ否定セラレ、尙ホ耳性咽後膿瘍ハ耳疾ナク問題デナイ。

咽頭扁桃腺ニ周圍膿瘍ノ成立シ得ルカ否カニ關シテハ未ダ信憑ス可キ觀察例ナキモ、本扁桃腺

基底部ハ粘膜最深層ノ軟骨纖維組織ト緊密ニ膠着シテ周圍ニ鬆粗ナ結締組織ヲ缺キ、從ツテ化膿ノ蔓延ヲ許サズト看做サレ、本症ノ不成立説ニ有力ナ根據ヲ提供スル。

其他「アデノトミー」等ノ手術後ノ蜂巢織炎ヲ招致スル事モアルガ之ハ自ラ明ラカデアル。

元來咽頭扁桃腺部粘膜ハ甚ダ強厚デ數個ノ縱走櫛狀皺襞及ビ細溝ヲ形成シ其中央ニ位セル深溝ヲ中咽頭窩 Recessus Pharyngeus medius ト云ヒ、之ハ深ク咽頭基礎腱膜ニ達スル事が稀デナク屢々内部ニ於テ囊狀ニ擴張スル即チ咽頭囊デアル。戈、貝田兩氏ニ依レバ此中咽頭窩ハ後鼻鏡檢査ニアタリ粘膜上ノ小孔トシテ非常ニ大ナル率ニ於テ發見スル事が出來、此小孔ハ腺窩導孔ト見ル可キモノナルガ故ニ、若シ開孔ガ閉鎖スレバ滯溜囊腫ヲ生ジ得ベントテ、數氏ノ報告者氏名ト自家症例ヲ掲ゲ、同時ニトルンワルト (Tornwaldt) 氏ハ詳細ナル臨牀の觀察ヲナシテ生理的ニ咽頭囊ノ寧ロ存在セナイ場合ハ稀デアルト言ツテキルト述ベラレテキル。斯ク觀ジ來マスルト本患者ニ於テモ既ニ咽頭囊ニ基ク滯溜囊腫ガアリ、且ツ軟口蓋破裂孔アル爲メニ鼻咽腔ハ外界ノ刺戟ニ暴露スル機會比較的ニ頻發デ遂ニ原則通り新タナ病原菌ノ感染ヲ見テ此處ニ扁桃腺膿瘍ヲ形成スルニ至ツタト考ヘルガ最も合理的デアル。

結 論

本例ハ口蓋破裂ヲ有スル10歳ノ女子ノ咽頭扁桃腺ニ來レル實質内急性膿瘍デ自覺の症狀モナク極メテ順調ナル經過ヲトリシモノデアル。

終リニ阿久根教授ノ御校閲ヲ感謝ス。

主 要 文 献

- 1) 井上英：急性扁桃腺膿瘍ニ就テ。大日耳鼻。第34卷。 2) 桑原良一：扁桃腺囊腫ニ就テ。大日耳鼻。第37卷。 3) 巽五一：扁桃腺囊腫ニ就テ。大日耳鼻。第35卷。 4) Robert Dölger: Ein bemerkenswerter Fall von acuter Entzündung der Rachenmandel (Rachemandelabszess): Monatschr. f. O. u. K. 1904. 5) Handbuch: Von A. Denker und Kahler Bd. 3. 6) Metzner: Ein Fall von mykotischer Mandelentzündung mit todlichen Ausgang. Berl. klin. Wochenschr. 1889. 7) 貝田. 戈: 激シキ噴嚏發作ヲ伴ヘル咽頭粘液囊腫ニ就テ。耳鼻。第2卷。
- ~~~~~